

ふせぐ・さまたげる

内海美幸

1. はじめに

本論では、国立国語研究所1964で「2.156₅防ぎ・ふさぎ」に分類されている語のうち、「ふせぐ」「さまたげる」をとりあげ、その意味について論ずる。いずれも「事態を阻止する」という意味の語であるが、実際にはその意味はかなり異なる。そのことは、辞書の記述を見てもわかる。

ふせぐ：侵されないようにくいとめる。

さまたげる：物事の進行をやめさせるような働きを何かがする。

【新明解国語辞典第三版】

ふせぐ：① 攻撃をおさえる。敵が侵入してこないように守る。

② さえぎって及ばないようにする。さえぎりとどめる。

③ 災いが起こらないように前もって注意したり、準備したりする。

さまたげる：他に支障が起るようにする。邪魔する。妨害する。

【日本国語大辞典】

しかし、「ふせぐ」「さまたげる」のそれぞれの意味は、両者を対照させることによる程度明らかになると思われる。以下では、(1)対象、(2)阻止のあり方、の二点から「ふせぐ」「さまたげる」の意味をまとめてみる。

2. 分析

2.1. 対象

「ふせぐ」の対象は話し手にとって「被害」と捉えられるものでなければならぬ^(注)。しかし、「さまたげる」の場合は、特に対象が「被害」である必要はない。

(1) 吹雪が ナポレオン軍の前進を ふせぐ。

(2) 吹雪が ナポレオン軍の前進を さまたげる。

(3) たまたま吹いた強風が 家康の攻撃を ふせいだ。

(4) たまたま吹いた強風が 家康の攻撃を さまたげた。

(1)(2)(3)(4)はいずれも自然な文である。ただし、「ふせぐ」を用いた(1)(3)では、「ナポレオン軍の前進」「家康の攻撃」はそれぞれ敵であるナポレオン軍の前進「敵である家康の攻撃」と解釈されるが、「さまたげる」を用いた(2)(4)は、特にそのよう

な解釈の制限はない。そのことは、次の例からもうかがうことができる。

- (5) 吹雪が 敵であるナポレオン軍の前進を ふせぐ。
- (6) 吹雪が 敵であるナポレオン軍の前進を さまたげる。
- (7)[×] 吹雪が 我々ナポレオン軍の前進を ふせぐ。
- (8) 吹雪が 我々ナポレオン軍の前進を さまたげる。
- (9) たまたま吹いた強風が 敵である家康の攻撃を ふせいだ。
- (10) たまたま吹いた強風が 敵である家康の攻撃を さまたげた。
- (11)[×] たまたま吹いた強風が 味方である家康の攻撃を ふせいだ。
- (12) たまたま吹いた強風が 味方である家康の攻撃を さまたげた。

「敵であるナポレオン軍の前進」「敵である家康の攻撃」は話し手にとって「被害」であるといえるが、「我々ナポレオン軍の前進」「味方である家康の攻撃」は話し手にとって、決して「被害」とはいえない。

- (13) 高い塀が 覗き見を ふせぐ。
- (14) 戸締りが 盗難を ふせぐ。
- (15) 歯磨きが 虫歯を ふせぐ。
- (16)[×] 根拠のない噂が エイズに関する正しい知識の獲得を ふせぐ。
- (17)[×] 豪雪が バスの運行を ふせぐ。
- (18)[×] 睡魔が 勉強を ふせぐ。

「覗き見」「盗難」「虫歯」は一般に「被害」と考えられるものだが、「エイズに関する正しい知識の獲得」「バスの運行」「勉強」は一般に「被害」とは考えられない。「さまたげる」であれば、(16)(17)(18)も適格である。

- (19) 根拠のない噂が エイズに関する正しい知識の獲得を さまたげる。
- (20) 豪雪が バスの運行を さまたげる。
- (21) 睡魔が 勉強を さまたげる。

もっとも、「さまたげる」の場合、対象が「被害」だと不適格になることがある。

- (22)[×] 規則的な食生活が 成人病になるのを さまたげる。
- (23)[×] 内需拡大が 景気の停滞を さまたげる。
- (24) 不規則な食生活が 病気が直るのを さまたげる。
- (25) 円高が 景気の回復を さまたげる。

(22)(23)と(24)(25)と比較すると、「さまたげる」の対象は「被害」であってはならない、という制限があるようにも思えるが、実際には対象が「被害」であっても「さまたげる」が適格なことがある。

(26) 高い塀が 覗き見を さまたげる。

(27) 吹雪が 敵であるナポレオン軍の前進を さまたげた。(=6)

(28) たまたま吹いた強風が 敵である家康の攻撃を さまたげた。(=10)

(26)は「覗き見をする」方の立場にたった発話と解釈されることが多いだろうが、「覗き見される」方、すなわち「被害」をうける方の立場にたった発話（「さまたげてくれた」くらいの意味）であってあってもよいだろう。また、(27)(28)では「敵であるナポレオン軍の前進」「敵である家康の攻撃」は話し手にとっては「被害」である。「被害」は「さまたげる」の対象になりにくいとはいっても、「さまたげる」の対象は「被害」であってはいけないうままではいえない。「ふせぐ」においては、「対象=被害」ということが重要であったのだが、「さまたげる」においては、なにか別の要因が関わっていると考えられるのである。

2.2. 「抑止」と「中断」

「ふせぐ」と「さまたげる」の重要な違いは、事態の阻止のあり方である。

(29) 花子と良子が授業中にしゃべるのを ふせぐ。

(30) 花子と良子が授業中にしゃべるのを さまたげる。

(29)(30)いずれも「花子と良子が授業中にしゃべらないようにする」という意味であるが、「ふせぐ」「さまたげる」時点で花子と良子がしゃべっているか否かを考えてみれば、その違いは明確になる。すなわち、(29)は「花子と良子がしゃべりださないようにする」という意味なのに対し、(30)は「花子と良子がしゃべっているのを中断させる」という意味である。このことから、「ふせぐ」は「ある事態が生じないように抑止する」ことで、「さまたげる」は「既に生じている事態を中断させる」ことだと考えられる。実際、事態が生じているのが明らかな文脈では、「さまたげる」は適格だが「ふせぐ」は不適格である。

(31)^x 花子と良子がしゃべっているのを ふせぐ。

(32) 花子と良子がしゃべっているのを さまたげる。

(33)^x 花子と良子がしゃべっているのに気がついた先生は、花子に質問して二人のおしゃべりを ふせいだ。

(34) 花子と良子がしゃべっているのに気がついた先生は、花子に質問して二人のおしゃべりをさまたげた。

また、「事態が生ずる前に（何かしておく）」ということの意味する「未然に」「事前に」等の副詞は、「ふせぐ」とは共起するが「さまたげる」とは共起しない。

(35) 花子と良子が授業中にしゃべるのを 未然に／事前に ふせぐ。

(36)[×] 花子と良子が授業中にしゃべるのを 未然に／事前に さまたげる。

事態が生じていまえばもはや「ふせぐ」ことはできないし、事態が生じていない段階で「さまたげる」ことはできないのである。

2.3. 「中断」の意味あい

2.2.では「さまたげる」は「既に生じている事態の中断」を表すとしたが、次の例ではどうだろうか。

(37) 突然の電話が 原稿の完成を さまたげる。

「原稿の完成」は瞬間的な変化であり、時間的な幅のある事態は表さない。したがって、「中断」が成立する余地はない。しかし、我々は(37)を、

(38) 突然の電話が 原稿を完成させようとしているのを さまたげる。

の意味で用いている。「原稿を完成させようとする動き」であれば、「中断」を想定することができる。ここからわかるように、「既に生じている事態の中断」は、「しゃべっているのをさまたげる」のような「継続している事態の中断」のこともあれば、「原稿の完成をさまたげる」のような「事態を成立させようとする継続的な過程の中断」のこともあるのである。

前者を「中断1」、後者を「中断2」と区別して考えることもできる。しかし、実際には両者の区別は微妙である。例えば、

(39) 吹雪が ナポレオン軍の前進を さまたげる。

は「ナポレオン軍」が「前進している」か、それとも「前進しようとしている」だけなのか曖昧である。

(40) 吹雪が ナポレオン軍が前進しているのを さまたげる。

(41) 吹雪が (まだ前進を始めていない) ナポレオン軍が前進しようとしているのを さまたげる。

このことから、「さまたげる」が「中断1」「中断2」いずれを表すかは、対象となる事態の性質によって決まると考えられる。「おしゃべりする」のような継続的な動作が対象の場合は「中断1」と解釈され、「原稿の完成」のような瞬間的な変化が対象の場合は「中断2」に解釈されるといった具合である。つまり、「中断1」「中断2」はひとつにまとめることができるということである。厳密な規定は難しいが、両者は「状況を変化させる(させようとする)過程の中断」としてまとめることができると思う。「継続している事態」も「状況の連続的な変化」と考えることができるからで

ある。

ここで重要なのは、中断されるのは「自らの力による」過程でなければならないということである。次の例をみてみよう。

(42)^x 規則正しい食生活が 成人病になるのを さまたげる。(=22)

(43)^x 歯みがきが 虫歯になるのを さまたげる。

(42)は、2.1.で、対象が「被害」の場合「さまたげる」が不適格になるとした例である。「成人病になる」「虫歯になる」という事態が成立するまでには、なんらかの継続的な過程があるはずだが、その過程を中断することを「さまたげる」で表すことはできない。

しかし、考えてみれば、「成人病になる」「虫歯になる」という事態に至るまでの過程は普通「自らの力による」ものではない。むしろ、意志に反して身にふりかかってくるものである。それに対して、「原稿の完成」に至るまでの過程は「自らの力による」ものである。(37)と(42)(43)の適格性の違いはまさにこの違いによると考えられる。(26)(27)(28) ((44)(45)(46)として再出)が適格なのは、対象が「被害」であっても、そこに「覗き見しようとする」「前進しようとする」「攻撃しようとする」といった「自らの力によるな過程」が想定できるからである。

(44) 高い塀が 覗き見を さまたげる。(=26)

(45) 吹雪が 敵であるナポレオン軍の前進を さまたげた。(=27)

(46) たまたま吹いた強風が 敵である家康の攻撃を さまたげた。(=28)

もちろん、(42)(43)も「成人病にかかりたいと思っているが、妻に規則的な食事を強要され、成人病にかかることができない」「(擬人法的に)歯が自ら虫歯になろうとしているのに、歯磨きのおかげで虫歯になれない」という文脈があれば適格であろう。

ただ、ここで「意志的」といわず「自らの力による」という言い方をしたのは理由がある。

(47) 大きな石が 川が流れるのを さまたげる。

(48) 円高が 景気の回復を さまたげる。(=25)

「川が流れる」「景気の回復」という過程が「意志的」な過程だとはいいにくい。しかし、我々はなんらかの形で、それらを「自らの力による」過程であると考えているのではないか。この点については別の議論が必要であり、ここでは省略する。

3. まとめ

残された問題は多いのであるが、「ふせぐ」「さまたげる」の意味を次のようにまと

めておく。

「ふせぐ」

好ましくない状況が生じないように事前にはたらきかけること。

「さまたげる」

状況を変化させる（させようとする）動きを中断すること。

注：徳川・宮島1972には「まもる」「ふせぐ」に関する次のような記述がある。

動作としては同じことだが、「まもる」は大事にしているものを対象にし、「ふせぐ」はせめてくるものを対象にしている。(p.372)

／引用文献／

徳川宗賢・宮島達夫1972 『類義語辞典』東京堂

日本国語大辞典刊行会編1972～76 『日本国語大辞典』小学館

山田忠雄他編1981 『新明解国語辞典第三版』三省堂

言語経歴：1965年9月 神奈川県相模原市生まれ

0歳～5歳 相模原市 5歳～18歳 山形

県米沢市 18歳～ 神奈川県川崎市

(東京都立大学学生)